
世界はアブノーマル（異常）

魔神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界はアブノーマル（異常）

【Nコード】

N7956K

【作者名】

魔神

【あらすじ】

この世界には、アブノーマル（異常）なものが異常にいる。これは、世界とは酷であることを知る、神が創造したアブノーマル（異常）な話である。

運命

「俺はこの世界におけるアブノーマル（異常）な一人であることを自覚している。
なぜなら俺は…」

「はっ！！今のは夢だったのか、朝から嫌な夢見せやがって最悪だな」

俺の名前は上泉^{かみいすみ} 京^{きょう}。髪型は黒髪で、歳は18である。
容姿は…上の下と言っておこう。

「どんな夢を見たの？」
と女の声が聞こえてきた。

「まあ俺がアブノーマルな理由は…ってなんでお前が俺の部屋にいるんだよ。それになんで俺の横にいるんだ？」

京の横で寝ている少女は、京と同じアブノーマル（異常）な人間であり、名前は日向^{ひむかい} 薫^{かおる}。
髪は黒、容姿はかなり可愛いほう。

彼女の正体は幼馴染であり、上泉 京の命の恩人。
そして上泉 京と日向 薫は、このアブノーマル（異常）な世界の命運をかける重要な人物なのである。

万物選択

「すみませんでした。」

なぜか、部屋で正座させられて、謝っているのは京である。

「なんで私があんなものを…とりあえず京は死になさい（笑）」

薫が、部屋にあるバットを持ち、京を撲殺しようとしている。だがバットが京に当たろうとするとき、京から声が聞こえた。

「自身に当たった物の拒絶」

すると京に当たるとバットが消滅した。

「その能力を使うのは卑怯よ。だから早く死になさい!!」

薫からは、殺意がみなぎっており、物投げ連打をしている。だが京の目の前でがどんと投げた物が消えていく。薫は諦めて、投げるをあきらめた。

「いつも思っているけど、その能力は卑怯。なんだっけ万物選択だっけ？」

京の能力は「万物選択」

この能力は、「万物を選べる」権利を持つことができ、触りたくなければ触りたくないものが通りすぎ、また触りたければ触ることができる能力である。

京はこんなすごい能力を持っているにも関わらず能力の話をする

「まったくもって嫌な能力だよ。」

とつぶやく。

「なんで京は、毎回毎回そんなことを言うの？」

薫が皮肉そうに聞くと

「自分が触れたいものを自由に選べる」なんて神様みたいじゃないか」

と京が遠い目で言うと、薫たちに軽い沈黙が訪れた。

その沈黙を消したのは、京の母親である、柚香である。

「京！早く朝ご飯食べないと学校遅れるわよー。あと薫ちゃんは朝ご飯食べてなかったら一緒にどおー??」

と柚香の声が聞こえ、京が無理矢理な笑顔で

「とりあえず朝ご飯でも食いにいきますか。」

と京が部屋に出ようとすると、薫が京だけに聞こえる声で言葉を発する

「もし京が神様だったとしても、日向薫はずっと上泉 京の友達だよ。」

京には、今の言葉に感謝と言う気持ちを乗せ、次は無理矢理な笑顔ではなく、ごく自然な笑顔で

「早く朝ご飯食わないと学校に遅れるぞ。」

「うん!!--」

と言うと薫が元気な返事で言うと京が小さな声で喋る

「ありがとう」

「ん??今小さな声でなんか言った??」

京が照れた声で

「なんにもない(テレ)」

「え??なにその照れた顔は??なに言ったか気になるんだけど」

と朝ご飯を食っている間は、ずっとその話を薫から聞かれ、母親の
柚香には、ずっと顔をニマニマとされていたのである。

道化師

男は逃げていた。

だが彼も、普通の人間じゃなくアブノーマル（異常）な人間である。

「さて。異常者から追跡されているが、能力で撃退しようと考えているのだが、そちらはどう思う？」

と無線機に喋りかけると女の声が聞こえた。

「まあ力を使っても良いけど、手加減しなさい。道化師。」

「了解。許可も出たし、殺るか。」

と言うと道化師と言われた男は、向きを変えた。

「侵入者が止まりましたので、排除します。」

と道化師の後を追っていたスーツの男の手が光る。

がその直後に、スーツの男は消滅した。

「手加減したが、まあ余裕だったな。」

と喋る道化師の中心から半径5mは何もない。少し前までは、コンテナなどがあつたのだが何も無い。スーツを着た男の肉片もない。風だけが吹いていた。道化師がすべてを破壊したのだ。無線機から声が聞こえた。

「周りを潰しながら「手加減したが」じゃないでしょ。」

「でも俺の能力はそんなもんだから、無理だ。」

道化師という男がそう言うと、オペレーターの方が

「………………。まあ話を変えらして、次の任務は危険よ。」

「そんなに危険なのか？」

「なんせ相手は………………。通称「白黒の選択者」と「世界の希望」よ。」

学校

京は、学生である。

今は、授業の時間滞なのだが屋上にいる。

いわゆるサボリである。だがサボリは京だけではなく、メガネをか
けた少女がもう一人いた。

「授業はダルいにゃ〜」

「にゃ〜」と喋る彼女の名前は、「瀬戸 泉」。
いちよ京の先輩である。

「瀬戸先輩ってどんな人？」と聞かれたなら、真っ先に言うことは
「変人」。

見た目は知的メガネ美人なのだが、喋り方が残念。

「やっぱりサボリはよくないと思うにゃー。先輩として後輩にどう
思うか聞きたいにゃ〜。」

「にゃーにゃー」やかましいと京は思いながら。

「サボリはよくないと思いますよ。先輩の方はどうなんですか？」

と京は聞くが、泉は

「んーそんなのわからんにゃ〜。」

と言っただけであり、京はあきれながら

「……………。先輩はなにがしたいですか？」

「大好きな後輩くんと話をしたいなーと思っただけにゃー。」

「うそはやめてください。気味がわるいです。」

「キーンコーンカーンコーン」とチャイムが鳴ると、泉が

「ここでお開きするにゃー。仕事もあるし、後輩くんバイバイ」

「そろそろその仕事も辞めたらどうです?」

「それは無理にゃー」

「まあ…わかりました。先輩なら、簡単に死なないと思いますが、良いところで手を引いてください。」

「まあ善処するにゃー」

と言い泉と別れた。

樋口 秀一

京が学校から出ようといってる時に、知り合いの男が話かけてきた。

「おいおい、授業さぼりやがって、また女といちゃいちゃしてたのか？」

と言う男は「樋上 秀一」という名前であり、変人2号である。

「やっぱイケメンは次元が違うなあー。自分が言うのもあれやけど、上の下はあると思うんだけど、そのイケメン様はどう思う？」

「めんどくさい」

の一言で変人2号の問題は解決したのであった。

秀一は話題を変えた。

「ところで、今日はめずらしく親の薫ちゃんおらんの？」

「急なバイトが入ったらしい。って「めずらしく」とはなんだ。それに薫は保護者じゃねえ。」

「いやいや、あれは保護者やろ。それとも恋人か？」

とヘラヘラしながら聞いてくるが、京はそれを無視しながら

「薫との関係はそんな軽いもんじゃない。」

と京は言うが、なにも知らない人間なら「なに言ってるんだこいつ

「？」と思われる言葉なのだが樋上 秀一は、京の過去を知る一人である。だからこれ以上は、深入りしない。また話の話題を変え、秀一が少し静かな声で

「今日はチームの集まりやけど薫ちゃんがバイトなら、やめとくか？」

「どうせ集まっても薫はいない。それにあいつは忙しいから来ないと思うし、それなら来週に変更しよう。」

「それが正解。めばしい情報もないし、それに野郎だけが集まっても面白くないから、来週が一番だな。」

俺たちは、チームである。

メンバー構成は、4人である。

上泉 京・日向 薫・樋上 秀一

あと一人女がいるが、やつは苦手なので、説明したくない。

京と秀一が、一緒に帰っている。

だが普通に帰り道に、行くではなく人のいないところに、それに無言で。

人のいないところに行くと、秀一が

「そろそろ出てこいよ。」

その一言で、3人組の男たちが出てきた。

一人はガタイが良く、一人はガリガリな体系で、一人はメガネをかけていた。

そしてガタイが良い男から

「いつから、わかってた？」

と秀一が満足そうな声で

「最初からだ!!」

京があきれた声で

「ただそれを言いたかったただけだろ？」

「そんなのあたりまえだ!!」

と自信満々で言うと、京が本当にめんどくさそうに

「帰って良いか？」

と言うとガタイの良い男が話に割り込み

「雑談中に悪いんだが、お前たちは抹殺対象。だから死んでくれな
いか？」

とガタイの良い男がそう言うと、2対3の殺し合いが始まった。

引くのも策のうち

まず、先手を打ったのはメガネをかけた男である。

「まずは、音の消失」

とメガネ男が言うと、音が消え、次はガタイの良い男が、地面を叩き、煙を撒いた。またメガネ男が言う。

「そして視界の消失」

次にガリガリ体系の男がナイフを取り出して、動きだした。

そのスピードは普通だが、秀一は聴覚と視覚が回復していない。ガリガリ体系の男が秀一を切り殺そうとしたが………
秀一が消えた。

「なっ！？消えた??」

そして秀一は、ガリガリの男の後ろに出現。

京の視界に正常になり、メガネをかけた男は力を解除した。だが周りを見渡すとガリガリの男は消えていた。

「まさか………。食ったのか？」

と京が言う。

「俺を狙ってきたから、食べた。まあどうでも良いが、あと二人だな。」

と秀一が言うと、メガネの男が小声で喋る。

「山目がやられただと？どうする宗雄？」

宗雄と言うガタイの良い男が少しだけ驚きながら喋った

「音と視界を消しながら、山目が殺されるとはさすが報酬が高いだけある。ここは引くのが定石。」

とつと、また煙で視界が見えなくなり、音も聞こえなくなり、宗雄と言う男とメガネをかけた男は消えたのである。

引くのも策のうち（後書き）

アブノーマル（異常）な能力紹介

宗雄（ガタイ良い男）

「破壊の誇り（埃）」

破壊した物を埃にする

山目（ガリガリ体系の男）

「絶対普通」

どんなことが起ころうとも関係なく普通になる

メガネをかけた男

「音決壊」
おんけっかい

音を一定の間だけ聞こえなくなる

推測

相手が消えた後に京が秀一に話し掛ける

「秀一。やつらを追えるか？」

「ギリギリいけると思うが、ここは俺たちも引くのが一番だと思うぞ。」

「なんでだ？」

「あくまで推測だが、宗雄と言われていた男は「お前たちは、危険人物。」と俺たちを知っている感じで話をしていた。そして「お前たち」と言っていた。だから俺たちを知っているやつが俺たちを危険人物扱いするなら、俺たちとチームを組んでいる薫と暦たちも必ず知っていると言うことを推測したが、それでもやつらを追うか？」

今まで秀一には、その頭のキレの良さで助けられたことが何度もあった。そして勘も冴えてる。その人間性を信頼して、京は喋る。

「なるほど。薫たちも狙われているというわけか……。ならここは引くしかないな。俺は薫を探すが、秀一は……。まあやつは大丈夫だと思うが、暦を探せ！！見つかり次第、いつもこのところに集合。」

「了解！！」

と二人は、別れたのである。

考える

京は、薫を探すため町を走っている。

「(さて、薫を見つけるには…心当たりがあるところを探すのが一番だが、急用なバイトが入ったって言うてた。なら当たるとしたら…薫のバイト先だな。)」

京は薫のバイト先に到着した。最近オープンしたようなとても綺麗な建物だった。その建物の中に入ると、見た目は25〜30歳ぐらいの若い男性オーナーいた

「あれ？京くんじゃないか？今日は、薫くんは来てないぞ。」

「えっ？今日は薫が来ていないのですか？今日は、「急なバイトが入った」と薫から聞いたんですけど？」

「もともと今日はバイトがあっただけ、薫くんは「明日は用事があるので休みます。」と言ってきたからバイトを休みにしてあげただけ？薫くんになにかあったのかい？」

「いや、なんでもありません。ただ薫を探していただけです。失礼しました。」

(バイトに来ていないだと？たしか急なバイトが入ったと言っていたが、オーナーはバイトはないと言っていた。どういうことだ？次はどこを探せばいい？考える。)」

だが若いオーナーは京の心の中を見透かしたように

「そんなに焦っているなら薫くんのいる場所を見つけようか？」

京はその言葉を冷静に聞き、言葉を返した

「いちよ聞いてみますが「見つけようか？」とはどういうことですか？」

なぜ京は「見つけようか？」の部分に反応をしたのか、それは普通の人なら、「一緒に探そうか？」と言うのが、一般的のだが、若い男性オーナーは、「探そうか？」ではなく「見つけようか？」という言葉を言ったからである。
若い男性オーナーは軽々しく

「だから「薫くんを見つければいいか？」と言っているのだけど？」

「本当に見つけることができるのですか？」

と京は真剣な顔で聞くと、若い男性オーナーは

「高くつくけどどうする？」

「（薫は京バイトと言っていたが、本当はバイトじゃなかった。つてことは、俺たちに秘密にしたいことでもあるのか？それとも……それは最悪の状態として頭に入れておくとして、実際は薫が無事かもしれないし、どうする？考える、考える、考える。」

「どうするんだい？」

オーナーは急かすように聞くと

「（考えるのは、やめだ。）オーナー。薫を見つけてください。」

「ちょっとだけ待っていると良いよ」

若いオーナーは笑顔で薫を見つげるための準備に取り掛かったのである

確率支配

薫は逃げていた。

なぜか怪しい人たちに後をつけられ、殺されそうになったので逃げている。

「はあはあはあ。(なんでよりによって今日が狙われるのよ、大事な用事があったのに、本当に運がないわ。)」

薫の後から、2人の男と1人の女が走って来ている。

2人の男と、1人の女は薫の命を狙っている者たちである。3対1でこちらが有利なものにもかかわらず、1人の男がわからなそうにつぶやいた。

「まじかよ。陽動とかいろいろしているのに、なんで引かなかったり、追いつきもしないんだ？」

薫は、「100メートル先が見える」とかの異常者ではない。

なぜ薫は3対1なのに、逃げ切れている理由は……

「(次は、道が二つ。正解は、右の道。)」

薫は、次に左を行けば罠があるというのに、薫は逃げる道を分かっていた。

日向 薫の能力は、「確率支配」である。

1/5や1/10でも、確率は1/1になる能力である。

だが当たる確率高ければ負担が少ないが、当たる確率が低ければ低いほど、脳に負荷がかかる。

薫は、「確率支配」という異常な力で、逃げ延びているのである。

「はあはあはあ（3対1の状況では、さすがに分が悪い。それに私は戦闘向きではないし、今は逃げるのが正解）。」

薫は、ただ単に逃げているのではなく「確立支配」の力で今は逃げることに正解と導いているが、まだ見ぬ挽回のチャンスと絶望に近づいたのであった。

情報収集

京は、走っていた。

薫のバイト先のオーナーから、薫の居場所を知り、向かおうとしていた。

「はあはあ、（まさか、オーナーが異常者とは…世界は意外とせま
いものだな。って今は、薫を助けるが先だ。もうすぐに追いつくは
ずなんだが、相手が何人いるかわからない、なら敵に見つかるって
のは「タブー」、いかに気づかれなく、薫を発見するのが、妥当な
策だな。そうになると、まず眼だな。」

「自分への目視の「選択」を拒絶」

京が万物選択の能力で、京を「見る」ことを拒絶したのだ。

「（薫発見。だが会うのはだめだ。まずは情報収集。相手の数は、
3人……いや違うな。

周りにあきらか違うやつが5人ほどいる。相手は8人だな。難しい
が殺るしかないな。」

京は薫を救出するための戦いが、始まるうとしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7956k/>

世界はアブノーマル（異常）

2010年11月15日09時14分発行